

## 書 評

石井久生・浦部浩之編：『世界地誌シリーズ10 中部アメリカ』朝倉書店、2018年3月刊、160p., 3,400円（税別）

2005年のことになるが、評者はポストクの機会を得てカナダの大学の地理学教室で研究に取り組んでいた。ちょうどそのころ、人文地理学分野の新任教員の採用人事があり、おそらく審査の一環としてのことであろうが、最終候補に残った者が学生にも公開で研究発表会をするというので、評者も参加した。その具体的な内容は忘れてしまったが、メキシコの地域研究であったことだけははっきり覚えている。発表を聞いている最中から、メキシコについて自分が何も知らないことに愕然としたからである。地域の大国たるメキシコについてさえその有様だったので、15年以上も経過した今となっても、中部アメリカについて自分にいかほどの知識があるのか、かなり心もとなく感じていた。結論からいうと、当時より多少は成長していたらしく、とくに日本よりもむしろ北アメリカとの関係という視点から読むことで、興味深く感じる場所が多かった。また、多少はなじみのあるオセアニアの島嶼部と比較しながら読み進めることもできた。

ともあれ、本書の内容を章ごとに紹介していこう。第1章「中部アメリカ地誌へのアプローチ－地域概念と地域区分」（石井久生）では、本書の導入として、中部アメリカの等質性と多様性を考慮しつつ、地域区分が検討される。中部アメリカは英語の *Middle America* に対応するが、スペイン語やフランス語には対応する用語がないという。そして、スペイン語や英語のみならず、ドイツ語の文献にも言及しながら、北アメリカと南ア

メリカ、ラテンアメリカとアングロアメリカといった用語の指す領域を検討したうえで、中部アメリカを、アメリカ・メキシコ国境（ブラボ川＝リオグランデ川）からパナマ・コロンビア国境（ダリエン地峡）までの大陸部とカリブ海に浮かぶ島嶼部で構成される地域とする。続いて中部アメリカの多様性や重要性が紹介されるが、本章では中部アメリカを構成する国・地域の複雑さがさまざまな角度から暗示され、中部アメリカの具体的なイメージが湧かなかつた読者も、後続の章を早く読みたい気分になるに違いない。

第2章「自然環境と災害－自然災害への脆弱性」（浦部浩之）では、中部アメリカを構成する国・地域の位置や面積などを確認したうえで、これらの国・地域がプレートの境界に沿って位置していること、北回帰線付近にあってほとんどが熱帯や亜熱帯に属するものの、貿易風の影響で意外とのぎやすいことなどが紹介される。ケッペンの気候区分をふまえた雨温図も示され、地誌学習の助けとなる。立地条件から容易に想像されるように、中部アメリカではハリケーンや地震、火山の災害が頻発し、低開発が被害を大きくしていることにも目を向ける。

第3章「民族と文化の混淆－征服から現代まで」（井上幸孝）では、1492年に中部アメリカに到達したコロン（コロンブス）の探検以来のスペインによる征服と植民地化、それ以前の先住民文化の展開を概観したうえで、ヨーロッパ人の進出以降に生じた民族や文化の混ざり合いが論じられる。メスチーソやムラートなど、学校で勉強した混血者に関する用語が登場するが、混血者はもとより、インディオや黒人もその内実は多様であったことへの注意が促される。

第4章「多様な農業－企業的農業から零細農まで」(新木秀和)では、土地所有形態や農業経営形態などに留意しながら、中部アメリカにおける農業が検討される。作物に関しては、とくにカリブ海地域においてプランテーションが発達したこともあって、伝統的農産物であるサトウキビやバナナ、コーヒーなどが卓越するが、果実や野菜、観賞植物といった非伝統的農産物の生産と輸出の増加も顕著であるという。その背景として、輸送技術の進歩などに加え、米国系スーパーマーケットの戦略や輸出業者の支援などが指摘される。評者は、中部アメリカからの輸入農産物が並ぶカナダのスーパーで、時期によって産地が変わっていくのを興味深く感じたことがあり、その背景を知ることができた。

第5章「都市化する中部アメリカ－急速な都市化と不均衡な集中」(石井)では、中部アメリカの都市の立地や規模、歴史的展開、さらには内部構造などが論じられる。とくに興味をひいたのが、分極化に特徴づけられる20世紀の都市構造と、分断化に特徴づけられる21世紀の都市構造のモデル図である。21世紀の分断化を象徴するのがゲートッドコミュニティの急増であるが、その背景に中部アメリカ住民にはイベリアの性格を継承した「閉じて住む志向」が存在するという説が紹介される。ただし、石井自身は本章の後にあるコラムでこの説にやや懐疑的な見解を示している。

第6章「ヒトと資本の移動－国内・国際人口移動からレメッサ(郷里送金)まで」(松井謙一郎)では、ヒトとカネの移動から、中部アメリカ経済の実態や課題が検討される。なかでも、ヒトの移動についてはアメリカ合衆国とスペインへの越境移動に注目し、前者では中部アメリカ出身者が目立つことや、後者では南アメリカ出身者と比べると相対的に少ないこと、いずれの地においても21世紀に入って発生した住宅ローン問題の影響

を大きく受けたことが紹介される。そして、移住した労働者からの郷里送金が地域経済にとって重要である一方で、そのお金が生産向上のための投資につながらないという短所があり、「郷里送金のオランダ病」としてくわしく説明される。

第7章「貧困と社会格差－データから確認する厳しさ」(久松佳彰)では、中部アメリカのうち中央アメリカ諸国をとりあげ、各国の所得に注目し、貧困の様相を概観したうえで、さまざまな指標を用いて貧困の様相が明らかにされる。さらに、所得や資産分配の不平等とその要因や背景が検討され、貧困や不平等の緩和に向けた取り組みが紹介される。とくに、貧困の緩和に向けた取り組みとして中央アメリカ諸国でも2000年代に相次いで導入された条件つき現金給付がややくわしく解説され、その前提としてガヴァナンス(政府の能力)の重要性が指摘される。

第8章「中部アメリカの地政学－列強・大国に翻弄される国々」(山岡加奈子)では、旧宗主国やアメリカ合衆国との関係、冷戦とキューバ革命などを通じて、大国に翻弄されてきた中部アメリカの姿が描かれる。ときどき、アメリカ外交史を読んでいるかのような錯覚に陥ったが、中部アメリカにとってそれだけアメリカ合衆国の存在が大きいことの裏返しであろう。最後にロシアや中国の中部アメリカへの進出が紹介され、ニカラグアやキューバがアメリカ合衆国の介入を抑止するためにロシアや中国を利用している側面があるとの指摘は興味深い。

第9章「多様なツーリズム－マスツーリズムから『新しい観光』まで」(杓谷茂樹)では、中部アメリカ諸国にとっていまや最重要の産業といえる観光について、海浜リゾートの開発、メソアメリカ古代文明の遺跡などを活用したヘリテージ観光の発展、クルーズ船観光とエコツーリズムに注目して紹介される。評者は最も強い関心をもって本

章を読んだ。というのも、評者のフィールドであるカナダの人々にとって、メキシコやカリブ海地域の海浜リゾートは大人気の観光地だからである。カナダは三方を海に囲まれているものの、トロントなどの大都市は海から遠く、そうした都市地域の住民は国内の海浜リゾートを訪ねるのにも航空機を利用した旅になるのがふつうである。したがって、かかる費用は国内と比較的近い海外とではあまり差がないであろう。中部アメリカのなかでもキューバはとくに人気で、たしかに中道左派的政策が好まれてきたカナダの人々の気風にあうのは分かる気がしていたが、本章を読んで海浜リゾートとしての魅力が改めて理解できた。日本人にとって中部アメリカは物理的にも心理的にも距離があるが、テキサラにまつわるユネスコ無形文化遺産などをうまく組み合わせるとおもしろい観光ルートができあがりそうな印象をもった。日本にはほとんど伝わらないが、コロナ禍のいま、中部アメリカの観光地はどのような状況なのだろうか。

最終章の第10章「世界の中の中部アメリカー中部アメリカの国際関係と日本」(浦部)では、国際関係の視点から、中部アメリカと欧米諸国との関係、中部アメリカの域内協力、さらには日本との関係が論じられる。中部アメリカの域内協力についてはまったくといっていいほど知識がなかったが、とくにカリブ海地域の島々には独立国と非独立地域とが入り交じり、(旧)宗主国もイギリス、フランス、オランダとさまざまであることから、域内協力が容易ではないことは想像がつく。そうしたなかで、限定的な役割しか果たしていないとはいえ、環カリブ海地域に位置する25か国が例外なく参加するカリブ諸国連合が1994年に成立していることを知り、今後の発展に期待がもてそうな気がした。なお、本書には一つの章にそれぞれ対応するコラムがあるが、本章だけ二つのコラムがある。それらは、日本の中中部ア

メリカを、また中部アメリカの中の日本を訪ねるためのガイドとなっており、浦部のフットワークの軽さに感嘆した。もとより、浦部の撮影した写真は巻頭の口絵のみならず、各章で活用されており、読者に具体的なイメージをもたせる貴重な資料となっている。

全体を通読して感じたのは、域内における指導的な国家の不在である。この地域の大国と目されるのは当然のことながらメキシコであるが、メキシコが指導的役割を果たしているとは感じられないし、その意欲があるのかも判然としない。むしろ、アメリカ・メキシコ・カナダ協定(USMCA)に近年衣替えした北米自由貿易協定(NAFTA)の締結以来、メキシコはアメリカ合衆国やカナダとの経済統合の下で発展しつつあり、たしかに文化地域という観点からはアメリカ・メキシコ国境が境界となろうが、メキシコとそれ以外の国・地域との間に溝のようなものを感じなくはない。域内の指導的大国の不在は南アメリカにもいえることで、なぜそうなるのか、気になるところである。

もちろんその一因は、中部アメリカにとっては北の隣国となるアメリカ合衆国の存在であろう。本書を読んでいても、まるでアメリカ合衆国についての書物を読んでいるような気分になる章があり、その影響力の強さを感じさせるのには十分である。一方、さらに北に位置するカナダの存在感は、本書ではほぼ皆無であった。先に紹介したように、たとえば多くのカナダ人が中部アメリカに観光に訪れているはずであるが、アメリカ合衆国との規模の違いにはいかんともしがたいものがある。

本書を読んでいて気になったのが、中米という表現が多くの章の記述にみられることである。注意深く読めば、それが中央アメリカの略であることに気づくが、一見すると中部アメリカの略のように感じられてしまう。また、引用した資料の都

合もあるのだろうが、ラテンアメリカという表現も散見される。第1章でていねいに説明されているとはいえ、なじみのうすい地名が頻出するなかで、評者のような不注意な読者は混乱してしまうかもしれないと感じた。

とはいえ、それは裏を返せば、大方の日本人にとってなじみのうすい地域を分かりやすく説明するには多大な労力が求められることを意味する。本書の執筆者の多くは、中部アメリカのなかでも特定の国・地域を主たるフィールドとしている。たとえば評者が地誌の授業でとりあげることの多い北アメリカは、先住民やフランス語話者の存在、あるいは連邦国家ならではの制度的な複雑さなどはあるものの、域内の特定地域をフィールドとする研究者が北アメリカ全体を俯瞰的にとらえることは比較的容易である。それに対して中部アメリカは、大陸と島嶼、独立国と非独立地域、さらには（旧）宗主国の違いにもとづく多様な言語や文化、社会や経済などに特徴づけられる地域である。強いていえば、オセアニアが似たような性格をもっていると考えられるが、オセアニアでは地域の大国としてオーストラリアが一定の存在感を発揮しているのに対して、先に述べたように中部アメリカにはそうした国が存在しない。これらのことをふまえると、中部アメリカを俯瞰できる本書は非常に貴重であることが分かる。多くの人が本書を手に取り、中部アメリカを身近に感じ、その魅力に気づいてもらえることを期待したい。

(大石太郎)

**伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編著：『経済地理学への招待』** ミネルヴァ書房、2020年6月刊、370p., 3,500円（税別）

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、大学でも遠隔授業が続いている。評者も講義系の

授業は動画配信にしているが、バリアフリー対応のため字幕を整備する必要に迫られることになった。その作業をする中で、自分の説明を見返すことになり、これまで地理学の概念の説明がいかにか曖昧であったのかを思い知らされることになった。評者の勉強不足もあって、毎回の授業で地理学の魅力を伝えるのに四苦八苦する毎日である。

そうした中で、本書は経済地理学の魅力を伝えるべく刊行された待望のテキストである。本書は同じ出版社の『人文地理学への招待』の姉妹編として刊行され、「経済現象を空間的側面や地域性から明らかにする」という経済地理学の命題に対し、産業地理学の視点に加えて、環境への視点の確保、地域への視点の復権、そして人間の再評価の視点から明らかにしようとする。はしがきにもあるように、本書が経済地理学のテキストであることから、面白そうなテーマであっても、経済地理学との体系との関係を意識して扱うことが意識されている。加えて、古典的な理論と事例説明のバランスがとられており、すべての章において難解な理論の説明に終始することもなく、単なる事例集にもならないよう限られた紙幅の中で工夫がなされている。

本書は4部19章（+序章）、14名の執筆者で構成されている。編者はこの分量と構成について、通常のテキストであれば授業回数に合わせた15章程度で構成されるが、本書では経済地理学のテーマの多様性と、章やテーマを選択することを可能にすることによって、説明の多様性を確保するためであると述べている。4部から構成される各章の内容は、必ずしも設定された各部のみに収まるものではなく、取り上げるテーマや空間スケールによりモザイク状の構造になっているため、読者は各章を行き戻りつつ本書を読み進めることができる。その手助けとして、本書では重要なキーワードが初出の見開きページで解説される